

投票しろ／投票するな

棄権主義について

ブラックローズ・ロサネグラ

ブラックローズ・ロサネグラ
投票しろ／投票するな
棄権主義について
2020

<https://podepopuinfo.wordpress.com/2020/11/08/voteordontbeyondabstentionism/> (2023年4月21日検索)

以下は、米国のアナーキズム全国組織ブラックローズ・ロサネグラの公式さいとに掲載された記事の翻訳です。

Vote —or Don't: On Abstention

翻訳は、機械翻訳に手を加えた10分ほどで仕上げたものです。意味がよくわからないけど知りたい、という場合は時間がある時に対応します。(ぼでぼぷ・インフォより)

ja.theanarchistlibrary.org

2020

目次

革命左翼と選挙	3
投票の道徳主義、棄権の道徳主義	4
棄権主義を超えて	5

もちろん、これらの闘いは真空状態では起こらない。世界は回転し続けており、国内的、国際的に重要な出来事は、私たちが関与する条件を変えるために行動するだろう。選挙の真ただ中であっても、経済危機にあっても、パンデミックにあっても（あるいはその3つすべてにあっても）、私たちは自分たちが置かれている状況を理解し、それに応じて行動することができてこそ、効果を発揮することができる。

投票するかしないかは別にして、民衆の勢力（人民権力）を建設することを優先しよう。

無政府主義者が選挙を嫌うことは周知の事実であるが、革命的社会主義（無政府主義がその一翼を担っている）を受け入れるほとんどの人々は、これらの出来事のスペクタクルに関連して自分たちをどのように位置づけるべきかについて、単純化された理解をしている傾向がある。この論文では、選挙主義に対応する戦略としての棄権に焦点を当てた無政府主義者の焦点は、現時点では不十分であるだけでなく、ブルジョア民主主義の再生産のために我々の敵によって使用されたのと同じ道徳化の論理で作動していることを論じている。

キャメロン・A 著

革命左翼と選挙

社会主義者がブルジョア民主主義における代表者の選挙にどのように関係していくべきかという問題は、150年以上もの間、論争の種となってきた。実際、この点についての意見の相違は（国家権力を求める問題に付随する限りにおいて）、第一インターナショナルを分裂させる原因の大部分を占めていた。

選挙が壮大なイベントであることは間違いない。他に類を見ないほどの資金が費やされ、専門家たちが延々と報道し、ツイッターでは常に次の話題を提供する準備ができていますが、選挙は政治的なものと同様に社会的、文化的なものだ。

今日でも、社会主義運動の各四分の一が独自の処方箋を作成して、同じ議論は激しさを増しています。アメリカで最も規模の大きい社会主義組織は、民主党内での基盤を構築し、メンバーの当選を支援することを中心に戦略を立てている。

一方、革命的社会主義者（無政府主義者を含む）は、異なる戦術をとっている。このカテゴリーに属するいくつかのグループは、明らかに選挙での成功が望めない自分たちの候補者のために、手の込んだポチョムキン・キャンペーン（役者もよくわかりません。先輩方のお知恵を拝借したい。）を展開し、その代わりに、自分たちの組織への注目や資源を皮肉たっぷりに集めるために利用しています。他の者、特に無政府主義者は、原則として選挙プロセスからの完全な棄権を求める習慣に陥っている。

この記事の焦点となるのは後者のカテゴリーである。

投票の道徳主義、棄権の道徳主義

アナーキスト（および他の革命的社会主義者）は、どのような理由で棄権を求めるのか。通常、それは、ブルジョア選挙で投票することは、積極的に国家を正当化することであり、したがって、それは、私たちの核となるイデオロギー的原則に対する妥協であるという主張に煮詰まっている。

これは皮肉なことに、野党が与えた損害の責任を負わないように、投票しなければならぬと主張する人々（通常はリベラル派）が展開するのと同じ論理の展開である。これは、2016年以降、米国の様々な左翼の頭の中で反響してきたおなじみのリフレインだ。

しかし、これらの立場はどちらも、政治権力の物質性、条件、国家の運営に根ざした問題を、個人の道徳的な計算に還元している点で、深い欠陥を持っている。これはリベラルに期待されていることかもしれないが、なぜ無政府主義者はほとんど同じフレームを採用してきたのだろうか。

これをさらに探ってみよう。

この枠組みでは、革命的社会主義者もリベラルも、同じ道徳的スキーマから対立する結論を導き出し、その核心には中心的な疑問がある。

革命的社会主義者は、リベラルとは異なり、国家自体が資本主義階級の道具であることを認識するのに十分な明晰さを持っているが、私たちはしばしば、個別の個人とその行動が国家の正当性の主な構成要素であると主張する基礎的な論理から抜け出すことができないように見える。これは、いわゆる「被支配者の同意」であり、すべての代表的な民主主義の基礎となると言われているが、無政府主義者は歴史的にこれを拒否してきた。

その代わりに、無政府主義者たちは、国家の形成、再生産、および正当性のプロセスが、強制力（軍隊、警察、刑務所）とイデオロギー的条件付け（学校、メディアなどの市民社会の制度を介して）の組み合わせによって行われると主張する国家の理論を進めてきた。

簡単に言えば、国家は存在するためにあなたの許可を必要としないし、その最も忌まわしい活動を行うためにも必要ないということだ。

それならば、ほとんどの無政府主義者が棄権主義を受け入れているのは奇妙なことだ。反権力の発展のための真剣な戦略を構築するために国家の無政府主義理論を完全に受け入れるのではなく、私たちは

ボイコットと同意の撤回という快適な道徳主義的言語に手を伸ばしているのである。

棄権主義を超えて

以上のように、棄権主義は、無政府主義的な国家論とは相容れないリベラルな政治理論の前提に基づいている。したがって、私たちは、棄権主義への依存を超えて、選挙と国家権力との関係において、実際の戦略的志向を展開しなければならない。

この文章は、解決策としての選挙制度への積極的な、熱狂的な、あるいは本当にあらゆる種類の関与を提案しているわけではないことは、十分に明らかであるべきである。実際、ここで主張されているのは、選挙への参加の問題を我々の考察から完全に排除されるべきだという考え方である。棄権も参加も、積極的な戦略を構成するものではない。この問題について熟考したり、もっと悪いことに、それについて道徳的なことを考えたりすることは、どんな真面目な革命家にとっても時間の深遠な浪費である。

われわれの最も緊急の課題は、国家と資本の両方にわれわれの意志を行使できる階級として自分たちを組織することである。これは、私たちが日常生活の中で集団的な力を構築し、振り回すことを可能にする、独立した、耐久性のある社会運動組織を構築したり、強化したりすることを意味する。職場の労働組合、家庭のテナント組合、学校の学生組合、そして近所の大衆集会。要するに、私たちの目標は、大衆的な力を生み出すことでなければなりません。

アナーキスト、特に「エスペシフィスモ」の戦略を採用する者は、これらの組織に関与し、その民主的、戦闘的、革命的な性格を発展させるために働くことが我々の課題であることを認識している。

現在、米国の勢力均衡は、資本と国家に決定的に傾いたままである。大規模な抗議行動は有望なものではあるが、デモ隊が街頭での行動を超えて、上述のような物質的に埋め込まれた組織を通じた持続的な運動の構築に向かっていることを示唆する兆候はほとんどない。私たちが譲歩を引き出す能力は、資本と国家にとって脆弱で価値のある分野でどれだけ効果的に圧力をかけることができるかにかかっていることを理解しておかなければならない。私たちは勝利することができるが、自由に使える適切なツールを持っていないなければならない。